第2回　特別研修会

インターディシプリナリーアプローチでのインプラント治療について

日時：令和2年6月28日（日）
場所：Web 開催
講師：日高 豊彦先生

福西 雅史（神奈川県）

CISJ 初の Web 開催、ウェビナーは、株式会社 WHITE CROSS（代表赤司征大先生）のもと、行われた。日高先生には、インターディシプリナリーアプローチでのインプラント治療について、ご講演頂いた。

まず、インプラントの周囲組織について、周囲骨は、インプラントとアバットメントが同径の場合、頬舌側2mm 以上、プラットフォームスイッチングの場合、1.5mm 以上の骨を確保し、インプラントと天然歯間に1.5mm 以上、インプラントインプラント間に3mm 以上の骨を確保すべきであると述べている。

次に、各種の移植骨・補填材や骨増生因子、遮断膜の種類・特性について述べられた。

そして、骨欠損に対する、骨造成の方法について、ベニアグラフト・GBR・スプリットクレフト・Distraction osteogenesis など、水平的・垂直的・混合型についての適応など、実際の臨床例を挙げて述べられた。

骨採取後の知覚障害の比較については、知覚障害出現後、下顎枝部では1年後、5% 程度のみ残存するが、オトガイ部では1年後も60% 程度、知覚障害が残存すると警鐘を鳴らした。

また、インプラント手術・骨造成時の切開・フラップ形成・骨補填材の填塞・遮断膜の設置・減張切開・縫合について、具体的に症例写真を交え、説明された。

また、日高先生は、審美領域のインプラントの長期予後のために、インプラントの頬舌に2mm 以上の軟組織が必要であると考えている。軟組織の厚みの不足を改善するための、結合組織移植術などの歯周形成外科手術について解説された。

日高先生は、多数の長期的な審美領域のインプラント治療について、余すことなくご紹介頂いた。私は、周囲組織と違和感なく調和した美しさに、大変圧倒された。

また、日高先生は、自身の論文で、『審美領域におけるインプラントに難しさがあるとすれば他の部位と違いすべての原則が全うされなければ患者や術者が満足する結果と長期予後が獲得できない可能性があるという点である。』と述べている。

私も、長期的に良好な臨床経過を維持するためには、解剖の理解と、基本に忠実な外科的手技、骨補填材や遮断膜への理解や、各症例に対する、適切なマテリアルとテクニックの選択、そして上部構造の形態の理解と選択、適切なメインテナンスだと、改めて思った。明日からも基本に忠実に臨床を行っていきたい。